

清末中国における女子教育近代化過程の一断面 —日本女性教習の活動及びその特色を中心に—

孫 長亮

はじめに

- I. 日本女性教習登場の背景
- II. 日本女性教習の清国での活動
- III. 日本女性教習の活動の特色
- IV. 日本女性教習の活動の具体例
 1. 蒙養院での活動
 2. 女子小学堂での活動
 3. 女子職業学堂での活動

おわりに

はじめに

近代における日中両国の女子教育交流史を取り上げる時、まず思い至るのは、20世紀初頭、中国から日本へ渡った女子留学生の存在であろう¹。いち早く日本の近代教育を受けた彼女らは、帰国後、中国女子教育の振興に力を注ぎ、その近代化に重要な役割を果たした。しかし、同時に看過できないのは、日本から中国に渡り、やはり近代中国女子教育に影響を及ぼした日本女性教習（清末「教員」の呼称）の存在である²。

日本女性教習は日本式の近代教育を草創期における中国の女学堂に接ぎ木し、「女子才無きは便ち是れ徳」、「婦人字を識らば多く淫を誨う」といった中国の伝統的な女性観に疑問を投げかけ、中国の女子が封建的束縛を抜け出て、男子と同様に教育を受ける権利を獲得するための一契機を生ぜしめた。特に一部の日本教習が女学堂の創設や運営で指導的役割を果たしたことは、近代中国女子教育の草創期において、独特な一断面を浮き彫りにした。後述する通り、日本女性教習は130余名を数え、量的には留学生に及ばなかったものの、実藤恵秀が指摘した通り、「一人の日本教師の渡往は、五十人の留学生の渡来にも匹敵」したのであり、彼女らの存在は決して軽視することがで

¹ 周一川の統計によると、清末女子留学の高揚期は1907年から1910年までであり、具体的には、1907年が139名、1908年が126名、1909年が149名、1910年が125名であった。周一川「清末留日中の女性」（『歴史研究』6、1989）。

² Marius B. Jansenによると、近代における日本教習の渡清は、中国留学生の渡日同様、世界史上初めてとなる近代化目標達成のための知識人の大規模移動であったという。Japan and China : from war to peace 1894-1972(Chicago:Rand McNall, 1975), 149頁。

きない³。

管見の限り、これまでの研究では、しばしば男性教習に対して関心が寄せられ、女性教習に関する研究成果は、日中両国でその蓄積は必ずしも多くない⁴。特に日本女性教習の登場、その人数及び清国での活動などに関する基礎的な考察は、依然十分に達せられていない。

本稿では、まず日本女性教習登場の背景を明らかにし、次に先行研究の成果を踏まえながら、日本女性教習の基礎的な活動内容を整理し、その上で彼女らの活動の特色及び教育現場での具体例について考察を加えたい。最後にこうした作業を通して、中国女子教育近代化の過程で彼女らが果たした役割について論じたい。

I. 日本女性教習登場の背景

清政府は洋務運動の行き詰まりと日清戦争の敗戦を経て、新たに富国強兵への道を模索し、視線を日本へと向けた。すなわち、かつては日本を「蕞爾たる国」と見なしていたが、今や世界の強国の一角を占めるものととらえ、「強敵を以て師と為す」をスローガンに掲げ⁵、日本の成功の経験を鑑として自国の改革を推進しようとした。そこで、特に国家を支える基盤として目を向けたのが、教育の近代化である。

中国ではアヘン戦争を経て、新たな教育を必要とする声が高まっていた。維新派の志士や開明的な官僚らは、教育、就中、女子教育の重要性と緊急性を痛感し、その振興の意義を力説した。例えば、1894年、実業家・思想家であった鄭観応は『盛世危言』で国力増強のための女子の力の動員を説き、国民養成の基礎たる女子教育の必要性を論じた⁶。1897年、維新派の中心人物梁啓超は『变法通議』で「論女学」を著し、「西方の全盛国と言えば米国、東方の新興国と言えば日本である。男女同権の論は、米国で大いに唱導され、日本で益々興ってきた」と述べ⁷、女学が家庭の教化、母権の確立、

³ 実藤恵秀『中国人日本留学史稿』（日華学会、1939）、140頁。

⁴ 汪向榮『日本教習』（三聯書店、1988、のち商務印書館、2014）は日本教習と中国教育近代化の関係を概観し、男性教習の活動について詳細な考察を行うが、女性教習に関しては補足的に扱うに止まる。蔭山雅博『清末日本教習与中国教育近代化』（雄山社、2011）は清末の師範教育に焦点を当て、主に奉天省や江蘇省での日本教習の活動について考察を行うが、これも男性教習を中心に論じている。一方、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版株式会社、1990）は女性教習に着目し、河原操子をはじめとする代表的な女性教習4人の活動について考察を行うが、1909年までに在清が確認される日本女性教習は23人と指摘するにとどまり、本稿が後述する人数と大きな開きがある。

この他、小川嘉子「清末の近代学堂と日本女子教習」（『国立教育研究所紀要』115、1988）は広東女子師範学堂を例として、日本女性教習であった宇佐美茂子、直子姉妹及び濱田松子の活動を考察する。拙稿「中国女子教育近代化過程における日本女性教習の位置—服部繁子と北京豫教女学堂を事例にして—」（『教育学研究紀要』62、2016）は北京における近代女子教育の嚆矢である豫教女学堂を取り上げ、学堂設立の初期、服部によって提唱された「良妻賢母」理念について考察する。加藤恭子「20世紀初頭における日本人女子教員の中国派遣」（『ジェンダー研究』18、2015）は日本女性教習養成機関の設立を中心に考察を行い、日本側の新聞や雑誌等を利用して女性教習の人数把握を進め、最終的に94人を明らかにした。

⁵ 康有為著、姜義華他編『康有為全集』（中国人民大学出版社、1998）4、104頁。

⁶ 鄭観応著、陳志良選注『盛世危言』（遼寧人民出版社、1994）、31-34頁。

⁷ 梁啓超『飲水室合集』（中華書局、1989）1、43頁。原文は以下の通り。なお史料の引用に際しては、旧字体を用いる。以下同様。

民族の振興の基礎となることを論じた。同年、維新派の志士である宋恕は『六字課斎卑議』を著し、「今日、日本を手本にし、教育令を下し、六歳から十三歳までの男女を皆入学させ、そうしない親は嚴罰に処すべし」と訴えた⁸。1898年、湖北自強学堂総監督である姚錫光は、日本の学校教育を視察し、その報告書である「察看日本各学校大概情形手摺」で、「(日本では)公・私立学校が林立し、中流以上の家庭で学問に通じない女子はいない。それ故、小学校では女性教員が半分に及ぶ」と指摘し、翻って自国ではまだ女子教育に関する法制が整っていないと扼腕した⁹。このように、長く中国で支配的であった「女子才無きは便ち是れ徳」、「婦人字を識らば多く淫を誨う」という封建的思想の限界が徐々に認識されるに至り、これを変えようとする機運が高まっていた¹⁰。

この時期、清政府は女子教育制度の整備にまだ正式に着手していなかったが、このような女子教育思潮の高まりを背景に、各省が先行して、雨後の筍のように近代女子学堂の設立が行われた。しかし、その女子学堂で教育を担当できる教習が足りないという事態に直面せざるをえなかった。例えば、国文、歴史などの科目であれば、学識や授業経験のある私塾の教習、或いは科挙の出身者を暫くその任に充てることができた。しかし、女子を対象とする格致(物理、化学等の自然科学科目の総称)、博物(動物、植物、鉱物及び生理という科目の総称)、音楽、体操、地理、家政、さらに幼稚園の唱歌、図画、手技等のような新式の科目は、当時の人々にとって未経験のものであり、これら科目の指導者を確保することは極めて困難であった¹¹。

このようななかで一つの動きがあった。1901年、北京東文学社を主宰する中島裁之は、知日の教育家である呉汝綸を介し、清政府の重臣李鴻章に謁見した。中島は李に日本から教習を招聘することを進言した。李は日本教習の招聘が中国における新式教育の教習不足を解決する手段となることを認め、2000人の招聘を決めた¹²。翌年、李の委託を受けた呉は渡日し、日本の教育制度等を視察した。その際、呉は日本の教育界で影響力のあった日戸勝郎と面識を得て、文部省と帝国教育会に対し、教習を選抜して養成し、中国へ派遣してくれるように依頼した。日戸の斡旋を受け、文部大臣である菊池大麓は「吾が国には有能で熟練の人材が乏しいが、清国の為に良材を選抜して推薦しよう」との態度を明らかにした¹³。また、帝国教育会会長の辻新次は呉に宛てた書簡において、教

西方全盛之國、莫美若；東方新興之國、莫日本若。男女平權之論、大倡於美、而漸行於日本。

⁸ 胡珠生編『宋恕集』(中華書局、1993)上冊、116頁。また、宋恕『六字課斎卑議』(1897)、変通篇、19頁。原文は以下の通り。

今宜取法日本、下教育令：令民男女六歳至十三歳皆須入学、不者罰其父母。

⁹ 朱有瓚編『中国近代学制史料』(華東師範大学出版社、1987)2輯、上冊、32頁。原文は以下の通り。なお、括弧内は筆者による。以下同様。

公私立立、故自中人之家以上、無不通學術之女子、是以小學校之中、女師及半。

¹⁰ この他、19世紀末期における女学を唱えた代表的な文章として、潘道芳の「論中国宜創設女義学」(1897)、康同薇の「女学利弊説」(1898)、嚴復の「論滬上創興女学堂」(1898)などが挙げられる。

¹¹ 例えば、1902年兵庫県内の幼稚園と小学校で女性教員が行う授業を参観した呉汝綸は「吾国でも模倣すれば、それほど難しくないが、それはこれを行う保母と教師がいればこそこのことである」と述べ、教習の不在を嘆いた。呉汝綸著・施培毅他校訂『呉汝綸全集』(黄山書社、2002)4、688頁。

¹² 前掲『日本教習』、72-73頁。

¹³ 「日戸勝郎来書」(前掲『呉汝綸全集』3)、746-747頁。原文は以下の通り。

習の選抜や養成に触れ、以下のように述べている¹⁴。

我が国の師範卒業生を募集し、貴国の歴史、地理を教え、風俗人情、通行の言語を教えんとする。

これは我が国の人士に借りて貴国の為に教習を養成しようとするものである。

1902年、両国政府は協議し、文学博士の服部宇之吉、法学博士の巖谷孫蔵等が日本から派遣され、教習の筆頭として渡清した¹⁵。李がいう2000人の招聘は途端に達成できる現実的な人数ではなかったが、ここに日本人教習の派遣が始まった。

なお、清政府の改革が男子教育から着手されたことによって、男性教習の渡清が女性教習に先行した。しかし、女子教育における教習の空白が放置されてよいわけではない。ここで動いたのは、中国各地の開明的な官紳や知識人らであった。彼らは急ぎ個人的なルートを使って、日本女性教習の招聘に動き出した。例えば、1902年、上海務本女学堂を設立した呉懷疚は、帝国婦人協会の創設者であり、実践女学校校長として知られる下田歌子と親交があり、下田を通じて河原操子を上海に招いた。同様に下田の推薦で、木村芳子が北京の同和（和育とも記載）女学堂に赴任した¹⁶。1905年、巖修は天津に巖氏蒙養院を創設し、日本視察時に知己を得た大野鈴子を招聘した。このように日本女性教習の渡清は、両政府間の関係を基礎としつつ、個人の関係も利用され、公私のルートで進められたのであった¹⁷。

Ⅱ. 日本女性教習の清国での活動

こうして渡清した日本女性教習について、筆者はさきにその網羅的な把握を試み、131名の日本女性教習の基本情報を得て、拙稿「清季日本女性教習拾遺」にまとめた¹⁸。本稿では、その後の調査で判明した奉天女子師範学堂の松田（某）、福建女子職業学堂の森田国子の2名を新たに加え¹⁹、

敵國雖乏幹濟之材力、然欲爲清國送良教員。

¹⁴ 「帝国教育会会長辻新次氏談片」（同上『呉汝倫全集』3）、793頁。原文は以下の通り。

竊擬募集敵國師範生之卒業者、授以貴國歴史地理、並告以風俗人情及通行之語言、此假敵國人士、養成爲貴國教員者也。

¹⁵ 前掲『中国の近代教育と明治日本』、155頁。教習派遣のさらなる一つの重要な背景として、アジア情勢が緊張する中、近衛篤磨らが提唱する「清国保全」論が世論を主導しつつある状況があった。近衛は1898年、東亜同文会の会長に就任し、中国各地における学校の設立や教育協力、留学の促進などを重視した。対支功労者伝記編纂会編『対支回顧録』（東亜同文会、1936）上巻、681頁。

¹⁶ 前掲『中国の近代教育と明治日本』、203頁。

¹⁷ 例えば、河原操子は後に官命を受けて蒙古に赴き、武井初子は初め官命で渡清し、後に張之洞と私的契約を結んで在清した。このように、途中で契約の公私が切り替わる場合もあった。これは教習が公私いずれも必要とされたからであり、また流動的な政策下にあったからであろう。

¹⁸ 拙稿「清季日本女性教習拾遺」（『近代中国婦女史研究』29、台湾中央研究院近代史研究所、2017）、160-185頁。ここでは従来の研究でよく用いられた日本側の新聞・雑誌、外務省の外交史料文書に止まらず、中国側の学制史料、『大公報』、『順天時報』、『東方雜誌』、『女子世界』などの新聞・雑誌、『四川文史資料選輯』、『瀘県誌』といった各地の文史資料・地方志も活用した。

¹⁹ 松田（某）、森田国子に関する情報の出典はそれぞれ以下の通りである。富香海「創立時期的奉天女子師範学堂」（中国人民政治協商会議遼寧省委員会編『文史資料選輯』5、遼寧人民出版社、1965）、63頁。「清国福州女子職業学校状況同地領事ヨリ報告 明治四十一年二月」（国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵、レファレンスコード：B12081877400）。

計133名の日本女性教習について、本稿での考察に必要な情報を抽出するとともに、彼女らの清国での活動状況を一層掘り下げ、表1に纏めた。なお、この統計は現段階の暫定的なものであり、今後の調査の進展によってさらに人数が増える可能性があることを付言しておく。

表1 渡清日本女性教習活動一覧（1902[明治35]年～1910[明治43]年）

| 在清 勤務 開始 時間 | 氏名/出身/ 年齢 | 勤務地 | 勤務先 | 月俸 (銀元) | 教 職 歴 | 備考 |
|----------------------|------------------|-----------------------|-----------------------------|------------|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1902 明治 35 | 河原操子 /長野県/27 | ①江蘇上海 ②蒙古 | ①務本女学堂 ②毓正女学堂 | | 有 | 東京女子高等師範学校卒業、元横浜大同学校教員。1902年下田歌子の紹介で呉懷疚の設立した務本女学堂で勤務。1年余りで、駐清公使の内田康哉の紹介を通じ、1903年に蒙古喀喇沁（カラチン）旗に赴き、旗王の貢桑諾爾布を助力して毓正女学堂の運営を司った。1904年11月一時帰国。後に旗王の福晋（妻）からの依頼で再度入蒙し、1905年末に帰国。 |
| | 服部繁子 /東京府/30 | ①直隸北京 ②直隸北京 | ①杜氏女子家塾 ②豫教女学堂 | | 有 | 東京帝国大学島田重礼教授の三女。竹橋女学校、成立学舎女子部で学ぶ。下田歌子の弟子、歌人。1902年夫の宇之吉と一緒に渡清。同年秋、杜徳興夫婦の創設した杜氏女子家塾の招聘を受けて普通科を担当。勤務時間は少なくとも二学期か。1905年8月～1908年5月実業家である沈鈞夫婦の豫教女学堂で勤務。 |
| | 高洲虎子 | 直隸北京 | 杜氏女子家塾 | | | 1902年杜氏女子家塾で勤務。担当科目は算数、図画等。勤務時間は少なくとも二学期か。 |
| | 尾崎衿子 | ①直隸北京 ②直隸北京 | ①杜氏女子家塾 ②四川公立女学堂 | | | 高洲虎子と同じ。1906年4月北京四川公立女学堂（前身は1904年の四川女学堂、設立者は杜徳興夫婦）の招聘を受け、手工、音楽等の科目を担当。 |
| | 川本（某） | 直隸天津 | 嚴氏女塾 | | | 1902年嚴修が開設した嚴氏女塾で勤務。川本は日本語と音楽、山口は手工芸、野崎は織布科目を担当。山口は南開学堂教習の妻か。 |
| | 山口（某） | 直隸天津 | 嚴氏女塾 | | | |
| | 野崎（某） | 直隸天津 | 嚴氏女塾 | | | |
| 1903 明治 36 | 戸野美知恵 /京都府/33 | ①湖北武昌 ②湖北武昌 | ①湖北幼稚園 ②武昌女子師範学堂 | 100 | 有 | 戸野みちる、戸野ミチエとも記載。東京女子高等師範学校卒業。後に京都府師範学校、彦根、長野等の高等女学校教員を歴任。夫の周二郎は湖北師範学堂教習。1903年明治政府内閣総理である桂太郎の委任を受けて湖北幼稚園に赴任。契約は1903年7月から2年。在任期間で武昌女子師範学堂の開設にも協力。 |
| | 丹トク | 湖北武昌 | 湖北幼稚園 | 20 | | 1903年美知恵とともに渡清。職務は保母。 |
| | 丹雪江 | ①湖北武昌 ②湖北武昌 ③不詳 | ①湖北幼稚園 ②武昌女学堂 ③張宅家庭教習 | 50 | | 丹雪枝、丹ゆきゑとも記載。丹トクと同じ。武昌女学堂も兼任、契約は1903年7月から約2年半。後に1906年春から張之洞私邸で家庭教習を担当。 |
| | 武井初子 /東京府 | ①湖北武昌 ②湖北武昌 | ①湖北幼稚園 ②武昌女学堂 | 50- 120 | | 武井ハツとも記載。東京高等女学校卒業。丹雪江と同じ。1903年7月～1910年7月在清。 |
| | 平野道江 | 湖北武昌 | 武昌女学堂 | | 有 | 東京女子高等師範学校教員。 |
| 1904 明治 37 | 小川文野子 /宮城県/20 | 湖南常德 | 常德師範学堂 | | | 小川文野とも記載。仙台高等女学校、松操学校高等科卒業、後に電信局で勤務。 |
| | 伊藤鶴子 | 浙江杭州 | 杭州女学堂 | | 有 | 東京高等師範学校選科卒業。夫の伊藤賢道は日文学堂堂長。中国語が多少分かる。担当科目は算学、音楽、体操等。 |
| | 山崎貞子 /愛知県 | 湖南常德 | 常德女学堂 | | | 不詳。 |
| | 池永マキ子 | 四川成都 | 某高等学堂付設の女学堂 | | | 夫の永六はその高等学堂の教習。 |

清末中国における女子教育近代化過程の一断面
— 日本女性教習の活動及びその特色を中心に — 孫 長亮

| | | | | | | |
|------------------|----------------------|----------------------------------|------------------------------------------|-------------|---|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1904 明治 37 | 氏名不詳 | 直隸北京 | 某工芸院 | | | 直隸総督袁世凱の夫人が工芸院を設立し、日本女性教習5名を招聘。彼女らの担当科目は手工等。生徒は貧困家庭の女子。 |
| | 氏名不詳 | 江蘇南京 | 養正学堂附属女学堂 | | | 同女学堂の設立者は民間の志士。 |
| | 氏名不詳 | 直隸北京 | 四川女学堂 | | | 夫も渡清教習。1904年3月頃から勤務か。同女学堂の募集対象は北京の四川出身者や、縁故者の家庭の娘。 |
| 1905 明治 38 | 加美田操子 | 直隸北京 | 豫教女学堂 | | | 服部繁子の仲介、北京在住者と推定。 |
| | 服部升子 /福島県 | ①直隸北京 ②直隸北京 ③直隸北京 ④盛京奉天 | ①豫教女学堂 ②淑範女学堂 ③陶宅家庭教習 ④奉天女子師範学堂 | 140- 200 | 有 | 服部ます子とも記載。福島女子師範学校卒業後、小学校教員を担任。後に日本女子大学国文科入学。服部繁子の仲介。1905年から豫教と淑範で勤務。担当科目は日本語、算数等。この間に北京顧問である陶大均私邸の家庭教習も担当。1908年2月奉天女子師範学堂へ転任。担当科目は日本語、体操、物理等。契約は1908年2月から2年。在清期間は合計11年、1914年帰国。後に日華学会主事を担当。 |
| | 亀田操子 /大阪府/22 | 直隸北京 | 豫教女学堂 | 30 | 有 | 服部宇之吉の紹介。契約は1905年9月から約2年半、担当科目は普通学。 |
| | 佐伯園子 | 直隸北京 | 豫教女学堂 | | | 服部宇之吉の紹介。夫の信太郎は八旗高等学堂教習。 |
| | 児島 (某) | 湖北武昌 | 武昌幼稚園 | | | 夫は武備学堂教習。 |
| | 春山雪子 /東京府 | 湖南長沙 | 湖南幼稚園 | 50 | 有 | いずれも元小学校訓導（操子は東京府小学校訓導）。契約は1905年2月から3年。科目担当は楽歌、体操、談話、行儀等。同時にフレーベルの恩物教授法を導入。 |
| | 佐藤操子 /東京府 | 湖南長沙 | 湖南幼稚園 | 50 | 有 | |
| | 木村芳子 /鹿児島県 /30 | ①直隸北京 ②直隸北京 ③直隸北京 | ①親王府同和女学堂 ②淑範女学堂 ③方巾巷学堂 | | 有 | 下田歌子の紹介。実践女学校卒業後、同女学校で留学生教員兼舎監担当。1905年から同和女学堂に勤務、章程を起草。華族女学校を参考にして管理、担当科目は日本語、算数等。さらに、淑範女学堂で勤務し、方巾巷学堂の名誉教習も担当。 |
| | 加藤みね子 /愛知県 | 四川成都 | 淑行女塾 | | 有 | 加藤みねとも記載。東京の某学校教員。女子体操学校卒業。1905年成都華陽県挙人である陸慎言の開設した淑行女塾に勤務。契約は1906年7月まで。 |
| | 大野鈴子 | 直隸天津 | 嚴氏保母講習所、同蒙養院 | | | 1902年日本教育視察中の嚴修と知り合い、1905年嚴の招聘を受けて渡清。担当科目は保育法、ピアノ、体操等。契約は1908年まで3年。 |
| | 氏名不詳 | 湖南長沙 | 景山女学堂 | | | 前浙江按察使李光久の夫人は景山女学堂を開設、日本女性教習を招聘して学務を司らせた。 |
| | 氏名不詳 | 福建福州 | 某女塾 | | | 担当科目は日本語。同女塾は1905年4月福建福州島石山に開設。 |
| | 氏名不詳 | 湖南長沙 | 常德府の某蒙養院 | | | 職務は保母。 |
| 1906 明治 39 | 安藤貞子 /長野県/23 | 直隸北京 | 北京女学堂 | | 有 | 元下伊那高等女学校教員。1906年7月清韓語学講習所1回生（以下、「講習所」）卒業。 |
| | 加藤美代子 /20 | 直隸北京 | 北京女学堂 | | | 加藤みよ子とも記載。講習所1回生卒業、服部宇之吉の紹介。 |
| | 堀井里子 | 直隸北京 | 北京女学堂 | | | 夫の覚太郎は明德学堂及び経正学堂教習。 |
| | 竹中多嘉 /東京府 | 湖南長沙 | 常德府蒙養院 | 60 | | 契約は1906年12月から1年。 |
| | 常田武子 /北海道/22 | ①直隸北京 ②直隸北京 | ①淑慎女学堂 ②実践女子職業学堂 | ①30 | | 1906年10月肅親王の妹淑淑妃郡主が開設した淑慎女学堂の招聘。担当科目は算数、唱歌等。契約は1906年10月から無期限。1907年3月から実践女子職業学堂で勤務。担当科目は体操、鉛筆画等。両学堂での兼任は不詳。 |
| | 野口芳子 /千葉県/17 | 直隸北京 | 慧仙女学堂 | 30 | | 野口よし子とも記載。千葉県銚子染織学校卒業。服部宇之吉の紹介。担当科目は普通科と織物。契約は1906年10月から無期限。 |
| | 山崎知寿 | 湖南長沙 | 常德府蒙養院 | | | 不詳。 |

| | | | | | | |
|------------------|------------------|----------------|----------------------|----------------|---|--------------------------------------------------------------------------------|
| 1906 明治 39 | 根津操子 | ①湖南長沙 ②湖北武昌 | ①常德府蒙養院 ②武昌女学堂 | ②50 | | 不詳。 |
| | 飯塚貞子 /福島県/27 | 直隸北京 | 四川公立女学堂 | 100 | | 日本女子大学卒業。契約は1906年12月から無期限。担当科目は普通科。 |
| | 今野ヤエ /宮城県 | 四川成都 | 淑行女塾 | 50 | 有 | 東京の某学校教員。契約は1906年3月から2年。 |
| | 田中たか子 /石川県/34 | 湖南常德 | 常德幼稚園 | 80 | 有 | 元本郷誠之小学校附属幼稚園保母、後に東京京橋村山小学校訓導。府立第三中学校校長八田三吉の紹介。職務は保母主任。 |
| | 斉藤チカ /和歌山県 | ①江蘇南京 ②江蘇南京 | ①旅寧第一女学堂 ②模範小学堂 | ① 65- 80 | | ①契約は1906年4月から2年。 |
| | 濱崎ウメ /鳥取県 | 四川瀘州 | 瀘州女子師範学堂 | 50 | | 契約は1906年5月から1907年2月まで。 |
| | 前田茂子 /高知県 | 盛京奉天 | 奉天女子師範学堂 | 150 | 有 | 前田しげ子とも記載。米国の某大学卒業。元華族女学校教員、夫の岩吉も教員。契約は1906年4月から3年。担当科目は理科学、英語、数学等。 |
| | 菱沼秋代 /宮城県 | ①浙江杭州 ②浙江杭州 | ①浙江工芸女学堂 ②旗営慧興女学堂 | ①50 ②40 | | 菱沼トキヨとも記載。契約は①1906年11月から1年6月。②1909年7月から12月まで。担当科目は体操、音楽、手芸等。 |
| | 鳥居きみ子 /24 | 蒙古 | 毓正女学堂 | | 有 | 鳥居喜美子、鳥居君子とも記載。徳島県師範学校女子部、東京音楽学校卒業。横浜手紅蘭女学校教員。服部宇之吉の紹介。夫の龍蔵と一緒に入蒙。河原操子の後を引き継ぐ。 |
| | 氷其梅 | 四川瀘州 | 瀘県女子師範学堂 | | | 留日帰国した章威と同行して渡清。職務はクラス管理兼教習。 |
| | 龍野てる子 | 福建 | 某宅家庭教習 | | | 講習所卒業。 |
| | 森田由子 | ①直隸天津 ②直隸北京 | ①嚴修氏家庭教習 ②北京技芸学校 | | | 森田よし子とも記載。女子高等師範学校附属女学校専攻科卒業。 |
| | 太田喜智 | 四川巴県 | 巴県女子師範学堂 | 50 | | 夫は重慶出身の留学生、夫の日本滞在中に知り合ったか。 |
| | 吉沢（某） | 江蘇南通 | 南通州公立女学堂 | | | 担当科目は日本語、体操、手工等。夫の嘉寿之丞は元張氏家塾教習、後に南通師範学堂教習。 |
| | 森田政子 | 江蘇南通 | 南通公立女子学堂 | | | 担当科目は体操、図画、手工、唱歌、算数等。契約は1906年2月から1907年正月まで。 |
| | 赤羽若枝子 | 直隸北京 | 外城女学伝習所 | | 有 | 元東京桜井女塾教習。教育家である桜井近子の養女。担当科目は編物、造花。 |
| | 後藤美之 /栃木県 | 四川眉州 | 眉州中学堂 | 120 | | 契約は1906年5月から1910年1月まで。 |
| | 佐口美都子 | 直隸天津 | 北洋女子師範学堂 | | | 担当科目は教育学。勤務時間は1年以上か。 |
| | 氏名不詳 | 直隸天津 | 中西女学堂 | | | 開堂の時、教習8名を招聘。そのうち、中国人6名、英国人1名、日本人1名。 |
| | 氏名不詳 | 江蘇南京 | 旅寧幼稚園 | | | 担当科目は蒙学と家庭教育。当該幼稚園は旅寧第一女学堂の付属幼稚園。 |
| 1907 明治 40 | 木村（某） | 直隸北京 | 京師第一蒙養院 | | | 担当科目は踊り。 |
| | 濱田松子 /長野県 | 広東広州 | 両広官立女子師範学堂 | 60- 70 | 有 | 濱田マツとも記載。日本女子大学卒業。実践女学校の留学生担当教員。下田歌子の紹介。担当科目は図画、手工、音楽、体操等。契約は1907年4月から1年。 |
| | 古田（某） | 直隸北京 | 八旗元氏女学堂 | | | 当該女学堂の設立者は長白元氏啓藩仙、啓梅仙。 |
| | 孟歌子 | 盛京奉天 | 奉天第一蒙養院 | | | 職務は助教。 |
| | 山口政子 /徳島県 | 盛京奉天 | 奉天第一蒙養院付設の保母養成所 | 100 | 有 | 東京女子師範学校卒業。8年の幼稚園勤務経験あり。契約は1907年3月から3年。職務は保母養成教習。幼児保育の責任をも持つ。 |

清末中国における女子教育近代化過程の一断面
— 日本女性教習の活動及びその特色を中心に — 孫 長亮

| | | | | | | |
|------------------|------------------|----------------|------------------------|-------------------|---|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1907 明治 40 | 大杉春子 /愛知県/23 | ①湖北武昌 ②湖北武昌 | ①武昌幼稚園 ②武昌女子師範学堂 | ②50 | | 大杉ハルとも記載。愛知高等女学校卒業。清国派遣女教員養成所（以下、「養成所」）卒業。契約は2年間。 |
| | 前田新子 /東京府 | 盛京瀋陽 | 奉天第一、二蒙養院 | 50 | | 養成所卒業。中国の教育視察員の仲介。職務は保母。契約は1907年3月から3年。 |
| | 山名瀧子 /熊本県/22 | 直隸北京 | 内城女学伝習所 | 50 | | 山名多喜子、山名タキ子、山名たき子とも記載。東京第三高等女学校、養成所卒業。服部繁子の紹介。契約は1907年5月から無期限。担当科目は普通科目、造花、手工等。内城女学伝習所は1906年江亢虎が西单牌楼北石克郡王府花園に設立。 |
| | 松里島子 /福岡県/33 | ①福建福州 ②福建福州 | ①福州女子師範学堂 ②福建女子職業学堂 | 70 | | 松里シマ、松里志磨、松里志磨子などとも記載。養成所卒業。契約は1907年9月から1年。両学堂を兼任。 |
| | 手塚数雄子 /長野県/24 | 江蘇蘇州 | 旅寧第一女学堂 | 50- 70 | | 手塚カツオ、手塚かづおとも記載。養成所2回生卒業。契約は1907年12月から1年。 |
| | 村越信子 /22 | 浙江湖州 | 呉興女学堂 | 年俸 1200 | | 日本女子大学家政科卒業、講習所3回生卒業。公使館書記である張元節の仲介。呉興女学堂は1907年沈譜琴が自宅に設立。 |
| | 阿部初野 /山口県 | 四川広安 | 宝枝女学堂 | 40 | | 阿部初常子、阿部初代子、阿部ハツノとも記載。講習所卒業。夫好豊（又「好一」）も広安州中学堂教習。契約は1907年2月から1年。 |
| | 片山多久子 /東京府 | 蒙古 | 毓正女学堂 | 60- 75 | 有 | 東京高等女学校技芸科卒業、講習所3回生卒業。1907年10月から勤務。 |
| | 池田亀代 | 盛京旅順 | 旅順小学堂 | | 有 | 東京高等女学校卒業。元長崎の某学校教員。 |
| | 山根花子 /東京府 | 四川宣順 | 自流井樹人学堂 | 80 | | 山根花とも記載。担当科目は体操、音楽等。契約は1907年2月から1年。樹人学堂は王朗雲が板倉埧に設立。 |
| | 田中美都子 | 直隸天津 | 北洋女学堂 | | | 1913年まで在留。 |
| | 岡田ウノ /京都府 | 直隸北京 | 慧仙女学堂 | 30- 50 | | 担当科目は織物。契約は1907年2月から無期限。 |
| | 宇佐美茂子 /新潟県 | 広東広州 | 両広官立初級女子師範学堂 | 60- 65- 100 | 有 | 宇佐美茂野、宇佐美繆子とも記載。新潟県女子師範学校卒業、元小石川尋常小学校教員。契約は1907年1月から3年。担当科目は日本語、体操、音楽、手芸等。 |
| | 宇佐美直子 /新潟県 | 広東広州 | 両広官立初級女子師範学堂 | 60- 100 | 有 | 宇佐美ナヲとも記載。茂子の姉妹。新潟県女子師範学校卒業、元三田高等小学校教員。契約は1907年1月から1916年まで。担当科目は日本語、体操、音楽等。 |
| | 山角まさ子 /20 | 広東広州 | 坤維女学堂 | | | 講習所3回生卒業。担当科目は算数、音楽、体操、保育法等。坤維女学は1903年劉佩箴等が設立。 |
| | 村上清子 /20 | 江蘇上海 | 尚志女塾 | | | 水戸高等女学校、講習所卒業。尚志女塾は1906年徐不更が崇明県に設立。 |
| | 高山アイ /青森県 | ①河南 ②湖南 | ②尉氏県東華英女学堂 | ②50 | | 講習所2回生卒業。②契約は1907年2月から1年。①河南の勤務先は未詳。 |
| | 加藤貞子 /東京府/19 | 直隸北京 | 京師第一蒙養院 | 50 | 有 | 加藤貞とも記載。東京女子師範学校卒業、後東京尋常高等小学訓導。担当科目は幼児教育科。契約は1907年7月から1年。 |
| | 大矢露子 /東京府 | 盛京奉天 | 奉天第一蒙養院 | 40 | | 契約は1907年10月から2年。職務は助教。 |
| | 小野八千代 /長野県 | 江蘇南京 | 旅寧第一女学堂付設幼稚園 | 50- 70 | | 契約は1907年12月から4年。職務は幼稚園の担当。 |
| | 松田（某） | 直隸天津 | 奉天女子師範学堂 | | | 担当科目は英語。勤務時間は1907年春から1909年冬約3年。 |
| 1908 明治 41 | 佐久間だいい | 湖南長沙 | 長沙師範学堂蒙養院 | 60- 75 | | 佐久間だいとも記載。講習所1回生卒業。 |
| | 川島あさ子 | 直隸北京 | 私宅家庭教習 | | | 養成所卒業。 |
| | 楡井よし子 | 盛京大連 | 金州公学堂 | | | 楡井よしとも記載。養成所卒業。 |
| | 片根清子 /23 | 江蘇上海 | 尚志女塾 | | | 講習所1回生卒業。 |

| | | | | | | |
|------------------|-------------------|----------------|--------------------------------|-------|---|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1908 明治 41 | 加藤なつ子 | 盛京鐵嶺 | 鐵嶺女学堂 | | | 講習所3回生卒業。 |
| | 新谷まき子 | 盛京大連 | 大連女学堂 | | | 講習所3回生卒業。 |
| | 鈴木清子 | 浙江杭州 | 高等女学堂 | | | 講習所3回生卒業。 |
| | 斉藤イシ子 /福島県/23 | 湖南長沙 | 長沙模範小学堂蒙養院 | 50 | | 斉藤イシとも記載。講習所卒業。契約は1908年1月から3年。 |
| | 市村満津美子 /長野県/25 | ①湖北武昌 ②湖北武昌 | ①長沙模範小学堂蒙養院 ②武昌女学堂 | ①50 | | 市村マツシ子とも記載。講習所卒業。①契約は1908年1月から3年。 |
| | 河合貞子 | 浙江湖州 | 呉興女学堂 | 50 | | 不詳。 |
| | 石田松子 /岡山県 | ①江蘇南京 ②福建福州 | ①旅寧第二女学堂 ②女子高等師範学校等 | 50-90 | | 石田マツとも記載。岡山高等女学校、東京職業学校卒業。①契約は1908年1月から1年。1911年一時帰国。②後に福州の女子高等師範学校、女子職業学校、女子中学校で勤務。担当科目は体操、音楽。契約は1913年11月から1年。 |
| | 春田政子 | 雲南干崖 | 安氏家庭教習 | | | 不詳。 |
| 1909 明治 42 | 豊岡梅子 | ①直隸天津 ②直隸天津 | ①北洋女子師範学堂 ②天津公立女学堂 | | | ①担当科目は音楽。 |
| | 横内文恵子 /長野県/20 | 盛京大連 | 金州公学堂 | | | 横内文恵、横内ふみ江とも記載。松本高等女学校卒業、養成所2回生卒業。関東都督府の招聘を応じて渡清。 |
| | 瀧岡照子 /鹿児島県 | 安徽 | 安徽女子師範学堂 | 50-85 | | 龍岡照子、瀧岡テルとも記載。鹿児島県師範学校、養成所卒業。契約は1909年6月から1年。 |
| | 酒井餘野子 /福島県 | 安徽安慶 | 布政使衙門幼稚園 | 50 | | 酒井ヨノ、酒井餘野とも記載。講習所卒業。契約は1909年9月から2年。 |
| | 近藤静子 | 直隸北京 | 金氏家庭教習 | | | 近藤しずか、近藤しずか子とも記載。松本高等女学校、養成所卒業。1909年初から勤務。 |
| | 加藤豊子 /愛知県/20 | 直隸保定 | 保定府女学堂 | | | 加藤とよとも記載。名古屋高等女学校、養成所2回生卒業。1909年春から勤務。 |
| | 川野いな子 | 江蘇南京 | 領事家庭教習 | | | 熊本高等女学校、養成所卒業。 |
| | 伊藤マツ /山口県/24 | 福建福州 | 福州女子職業学校 | 70 | | 伊東まつとも記載。共立女子職業学校卒業。契約は1909年11月から2年。福州領事館外務書記官の岩村成允の紹介。 |
| | 菊地續子 /神奈川県 | 浙江湖州 | 呉興女学堂 | 40 | | 菊池鎮子とも記載。 |
| | 松田鐵代 /岩手県 | ①江蘇南京 ②江蘇南京 | ①毓秀女学堂 ②恵寧女学堂 | 40 | | ①②契約は明治1909年1月から1年。担当教科は美術、体操、音楽等。旅寧第一、二女学堂及び江南女学堂でも勤務。 |
| | 矢野ヨシエ /長崎県 | 江蘇南京 | 江南女学堂 | 40 | | 矢野ヨシ江とも記載。 |
| | 大野キヨ子 /福島県 | ①四川成都 ②四川成都 | ①淑行女塾 ②成都女子師範学堂 | 70 | | 大野喜代、大野きよ子とも記載。東京女子体操音楽学校卒業。①契約は1909年4月から12月まで。担当科目は体操、音楽等。 |
| | 石田久子 /岡山県 | 江蘇南京 | 督署模範小学堂 | 40-80 | | 契約は1909年12月から3年。 |
| | 佐藤操 | ①湖北武昌 ②湖北武昌 | ①湖北模範小学堂 ②湖北女子師範学堂 附属幼稚園 | 70 | | 佐藤ミサヲとも記載。①の勤務1909年10月から1911年7月。②職務は保母。 |
| | 氏名不詳 | 直隸北京 | 首善第一女工場 | | | 担当科目は刺繍。当校は度支部左侍郎紹英である農工商部参議の魏震により西单牌楼北辟才胡同に設立。 |
| 1910 明治 43 | 小山内高子 /青森県/29 | 吉林省吉林市 | 吉林省師範学堂蒙養院 | | 有 | 青森県師範学校卒業、講習所卒業。元麻布小学校教員。1910年春から勤務。 |
| | 峯旗操子 /京都府 | 吉林長春 | 吉林女子師範学堂 | 100 | | 夫の良充は吉林師範学堂教習。担当科目は理科、音楽、手工、図画等。勤務時間は1916年までと推定。 |

清末中国における女子教育近代化過程の一断面
— 日本女性教習の活動及びその特色を中心に — 孫 長亮

| | | | | | |
|---------------------|-----------------|----------------|---------------------|------------------|-------------------------------------------------|
| 1910 明治 43 | 坂井筆子 /長野県/25 | 福建福州 | 福州女子師範学堂 | 70 | 坂井筆とも記載。長野県女子師範学校、東洋女塾卒業。 契約は1910年春から1年。 |
| | 田添幸枝 /熊本県 | ①四川成都 ②四川成都 | ①淑行女学堂 ②四川女子師範学堂 | ① 140- 170 | 元東洋女芸学校校長（1906年辞職）、②契約は1910年7月 から4年。 |
| | 河瀬梅子 | 福建福州 | 福州幼稚園保母養成 所 | | 神戸ミッションスクール卒業。 |
| 勤務 時間 不詳 者 | 川島福子 | ①直隸北京 ②直隸北京 | ①北京女学堂 ②同和女学堂 | | 夫の浪速に随行。浪速は北京高等巡警学堂監督。 |
| | 許如華 | 盛京宮口 | 官立淑慎女子初等小 学堂 | | 許如華は中国名。勤務開始時間は1909または1910年か。 |
| | 内田正子 | 直隸北京 | 北京女学堂 | | 夫の康哉に随行。康哉は駐清公使。 |
| | 藤田駒子 | 直隸北京 | 豫教女学堂 | | 北京の会文学堂でも勤務。 |
| | 氏家玉井子 | ①直隸北京 ②直隸北京 | ①北京女学堂 ②同和女学堂 | | 夫の謙曹に随行。謙曹は京師大学堂教習。 |
| | 岡島（某） | 江蘇上海 | 務本女学堂 | | 岡島とも記載。担当科目は英語。 |
| | 円（某） | 湖北武昌 | 湖北師範付属幼稚園 | | 「円」は日本姓の音訳か。 |
| | 岡崎千代 | 江蘇松江 | 清華女学堂 | | 担当科目は体操。 |
| | 相田智保 | 四川成都 | 成都女子師範学堂 | | 担当科目は手工。 |
| | 小山（某） | ①広東広州 ②広東広州 | ①某省城女学堂 ②時敏学堂 | | 1904年から両学堂を兼任。 |
| | 森田国子 | 福建福州 | 福建女子職業学堂 | 20 | 清国の在住者、産婆。職務は松里島子の助手。1907、あ るいは1908年から勤務と推定。 |
| | 氏名不詳 | 直隸天津 | 敝氏保母講習所 | | 職務は保母。大野と一緒に勤務と推定。 |

※注：以上のほかにも日本女性教習と思われる者がいるが、表1に挙げていない。すなわち、1909年2月12日付の『婦女新聞』457号「婦人界」欄に養成所1回生の新井みむろ子と岩倉美代子が近々「渡清婦人界の為に尽瘁」と見える（福島四郎編集『婦女新聞 第10巻 明治42年』不二出版、1989、58頁）。この他、1904年の『女子世界』11期に某侍郎夫人が北京で女工芸局を開設して日本女性教習を招聘する予定であると見え、同誌12期には揚州の向無女学が日本女性教習を招聘し、養蚕や染織等の科目を担当させる予定であると見え（女子世界月刊社編『女子世界』3、線装書局、2006、1015、1112-1113頁）、さらに『東方雑誌』1巻5号に蒙古カラチン旗王が慶親王に頼んで日本女性教習を招聘する予定であると見える（商務印書館、1904、124頁）。もしこれらの招聘が実現していたならば、少なくとも5人の日本女性教習が渡清したはずだが、残念ながら、確認できない。また、辛亥革命後、淑行女塾は金野（某）、田天（某）という2名の日本女性教習を招聘し、音楽、体操、造花、工芸等の科目を担当させ（傳子實「回憶淑行女塾」、中国人民政治協商会議四川省委員会文史資料研究委員会編『四川文史資料選輯』38、四川人民出版社、128頁）、1914年福州女子師範学校は土橋アサを招聘したという記録も残されるが（契約は1914年9月から1915年6月まで、月俸は60元、担当科目は体操と音楽。『支那僱傭本邦人人名表 大正3年12月現在』、国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵、レファレンスコード：B02130228400）、ここでは統計に含めなかった。

Ⅲ. 日本女性教習の活動の特色

表1に見える通り、渡清した日本女性教習の活動は、20世紀初頭の限られた時期におけるものであり、それはちょうど近代中国における女子教育が始まった時期であった。この草創期に日本女性教習が行った活動の特色を把握するために、表1をもとに集計を行い、表2、表3、表4及び図1を作成した。これらの図表に拠り、日本女性教習の活動の特色として、拙稿「清季日本女性教習拾遺」で指摘した4点を併せて、以下の8点を指摘できる。

第1に、日本女性教習の清国での活動はほぼ中国全土に至る広範なものであった。彼女らの勤務

地は、表2に整理した通り、政治文化の中心地北京を擁する直隸、また江蘇、浙江、福建、広東等の沿海地域だけでなく、当時、鉄道も整備されず、開発の途上であった内陸地域、さらに雲南、蒙古等の少数民族地域にも及んでいた。

第2に、彼女らの勤務地、勤務先から学堂の兼任や学堂間の異動が少なからずあった。例えば、湖南の根津操子、直隸の森田由子、広東の小山氏などは2つの学堂で教習を兼任した。また、1906年契約期満了の丹雪江は、清政府重臣である張之洞の私的な招聘を受け、張氏邸宅の家庭教習となった。直隸の服部升子は、北京豫教女学堂から離れて間もなく、1908年2月に奉天女子師範学堂

表2 日本女性教習の勤務地

| 省 別 | 人数 | 省 別 | 人数 |
|-----|-----|------|-----|
| 直隸省 | 45人 | 四川省 | 12人 |
| 盛京省 | 11人 | 雲南省 | 1人 |
| 吉林省 | 2人 | 浙江省 | 6人 |
| 江蘇省 | 17人 | 福建省 | 7人 |
| 安徽省 | 2人 | 広東省 | 5人 |
| 湖南省 | 12人 | 蒙 古 | 2人 |
| 湖北省 | 11人 | | |
| 合 計 | | 133人 | |

※勤務地が複数の者は初任地で集計、表4も同様。

表3 日本女性教習の渡清前経歴（学歴・経歴）

| 学歴・経歴 | 人数 | 学歴・経歴 | 人数 |
|-------|-----|------------|-----|
| 校 長 | 1人 | 清国派遣女教員養成所 | 12人 |
| 教 員 | 11人 | 清韓語学講習所 | 17人 |
| 訓 導 | 4人 | 師範学校 | 2人 |
| 大学卒業 | 2人 | 高等女学校 | 2人 |
| 教会学校 | 1人 | 体操・音楽学校 | 2人 |
| 職業学校 | 3人 | 不 詳 | 76人 |
| 合 計 | | 133人 | |

表4 日本女性教習の勤務先

| 類型 | 人数 | 類型 | 人数 |
|-------|-----|------|-----|
| 蒙養院 | 27人 | 師範学堂 | 16人 |
| 女子私塾 | 12人 | 家庭教習 | 6人 |
| 小学堂 | 55人 | 工芸院類 | 7人 |
| 伝習所類 | 5人 | 職業学堂 | 2人 |
| 中・高学堂 | 2人 | その他 | 1人 |
| 合 計 | | 133人 | |

で2年勤めた。浙江の菱沼秋代は1906年11月浙江工芸女学堂に雇われ、1年半勤めた後、1909年7月から12月まで旗営慧興女学堂でも務めた。南京で家庭教習を担当した酒井餘野子は、その後安徽省布政使衙門幼稚園に赴任した。このほか、江蘇の河原操子と石田松子、湖北の市村満津美子、河南の高山アイも学堂間の異動があった。

第3に、判明する限り、表3に示すように、日本女性教習の多くは日本で一定の教育を受けていた。高等女学校、師範学校のほか、教会学校、職業学校、染織学校等の出身者がおり、さらに村越信子、服部升子、前田茂子のような大卒者もいた。また、平野道江、加藤みね子、小山内高子ら教員の教職経験者もあり、元校長の田添幸枝もいた。注目すべきは、清韓語学講習所と清国派遣女教員養成所の出身者が多いことである。前者は1905年に淑徳女学校によって、後者はその翌年に東洋婦人会によって開設された²⁰。この両所は中国等における（前者は韓国を中心に）女子教育を担う教習を養成するために設立された機構である。「清国女子教育の責任は殆ど我邦婦人の双肩に懸り」、「彼女女子ヲ啓沃スルノ任ニ従事セント欲スル志望者ニ対シ、其教師タルニ必要

²⁰ 東洋婦人会は1904年に結成され、会長の鍋島栄子は東亜同文会の鍋島直大侯爵の夫人であった。同会は翌年、「東方善隣の諸州、同好の姉妹諸友に謀りて、広く相交り、遠く相扶け、共に合同協力し、互いに切磋琢磨」という会の主旨を示している。「東洋婦人会 平和事業 東洋婦人会創立の主旨」（『女鑑』第15年1号、1905年1月1日付、中島邦監修『女鑑』第55巻、大空社、1992）、153頁。

ナル学科を授クル」ことを目指し²¹、前田新子、山名瀧子、片根清子など30名近い教習を清国に送り出し、清末女子教育を支える日本側の代表的機構となった。

第4に、日本女性教習の勤務先は、表4に示すように、女子師範学堂もあったが、学齢前の幼児教育機関の蒙養院、初等程度的女子私塾や女子小学堂が中心であった。日本の高等女学校のような中等学校はまだ発達していなかった。彼女らが担当した科目は、蒙養院では行儀、訓話、手技、唱歌、遊戯などであり、小学堂では家事、体操、音楽、図画、手芸などであった。一部の蒙養院（湖北幼稚園、湖南蒙養院等）や小学堂（同和女学堂、務本女学堂等）では日本語科目も置かれ、教習は会話、読み方、書き方、綴り方を教えた。

第5に、日本女性教習の契約期間は、多くの場合、2～3年であり、なかには長期間勤務する者もいた。例えば、直隸の田中美都子は6年間、湖北の武井初子は7年間、広東の宇佐美直子は10年間勤務した。一方、日本女性教習の在清活動は比較的不安定であり、兼任、転任、臨時受命、あるいは学堂の経営不振のための辞任という状況が絶えなかった。こうした状況下にあつて、夫と随行した内田正子、氏家玉井子などの日本女性さえ招聘の対象となった。

第6に、外国からの招聘のため、大部分の日本女性教習は高給で雇い入れられた²²。判明している限り、普通的女性教習は50～60元（年俸600～720元）であり、服部升子、田添幸枝等のような一部の者は140元以上に達した。こうした日本女性教習への俸給について、四川の学堂に勤務した山根花子に関する、以下のような回想がある。

1907年、日本人の山根花子は自流井樹人学堂の招聘に応じ、体操、音楽等の科目を担当し、月俸は80元（年俸960元）であった。当時白米は斗（10リットルに相当）ごとに45斤（1斤は596.82グラムに相当）であり、1元もしない。当時一つの県の書院を司る举人或進士は「山長」と尊称されたが、その年俸は560元に過ぎなかった²³。

このように、当時普通的女性教習の月俸額は「山長」と大体一致し、そのなかの一部の月俸は「山長」の2倍にも達した。また、当時天津のような都市で、4元あれば一般的な5人家族の1ヶ月の日常生活を十分にまかなえたという。ここから、当時中国で勤務した日本女性教習が非常に厚遇されていたことを窺える²⁴。

第7に、日本女性教習の渡清は、先に触れた通り、公私のルートがあった。公的ルートの場合、政府による官雇い、清国派遣女教員養成所と清韓語学講習所による派遣などがあった。なかには阿部

²¹ 『読売新聞』10335号（1906年3月22日）、2面。また、鱒沢彰夫「女性中国語教育と『燕京婦語』」（『中国文学研究』17、1991）。

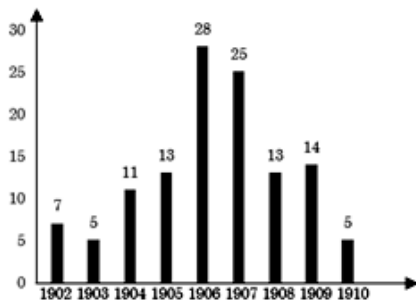
²² 汪向荣によると、日本教習の報酬は非常に高く、本国教習の5～10倍だと述べている。前掲『日本教習』、122頁。

²³ 王季潜「記自流井王氏樹人学堂」（前掲『四川文史資料選輯』38）、128頁。また、児山奇人も日本教習の月俸が非常に高いことを指摘している。児山奇人「北清通信」（『教育研究』24、1906年3月1日、『教育研究自第二十二号至二十七号 明治三十九年』、教育出版センター、1984）、86頁。

²⁴ 全国政協文史資料委員会編『中華文史資料文庫』（中国文史出版社、1996）17、911頁。

初野のように夫婦で教習の資格を持って渡清する例もあった²⁵。私的ルートの場合、木村芳子や、大野鈴子らのほか、例えば伊藤マツは、福州女子職業学校校長である施景琛が友人の福州領事館外務書記官の岩村成允に依頼し、岩村が私的に共立女子職業学校に問い合わせ、渡清が決まった²⁶。伊藤を呼んだ岩村の立場を単純に私人と公人に分けにくいように、渡清ルートの公私も単純には分けが

図1 在清日本女性教習逐年増加人数推移



※ 勤務時間不詳者(12人)は除く。

たいが、ルートが一元的でなかったゆえに、それがむしろ教習の確保に繋がった側面もあったと思われる²⁷。

第8に、図1に見える通り、日本女性教習の渡清は1902年に始まり、1906年から1907年がピークであった。1910年には渡清者が大きく減り、最終的にはほぼ全員が帰国し、歴史の舞台から姿を消した²⁸。その理由は、辛亥革命が近づき、情勢が不安定にあったことに加え、欧米の教育勢力が伸長したこと、中国側による教習の自給体制が整備され始めたことが考えられる²⁹。

IV. 日本女性教習の活動の具体例

前章では日本女性教習の活動の特色として、渡清前の日本女性教習の学歴、渡清のルート、教育活動の範囲、契約期間、俸給額等について述べた。それでは、このような特色を有した日本女性教習の教育活動はそれぞれの教育現場で具体的にどのように展開したのか。以下、日本女性教習の主要な勤務先であった蒙養院、小学堂及び女子職業学堂を対象として、五つの具体例を示したい。この五つの事例を取り上げるのは、比較的まとまった史料が残されているからに他ならないが、①、

²⁵ 例えば、1907年1月21日付の『婦女新聞』350号の「女学界」欄に「清国四川省順慶府広安州宝枝女学堂より女教員一名招聘の申込あり女子清韓語学講習所出身の阿部初代子之に依じてその夫好一氏が同地師範学堂に招聘せられたると同伴して此程出発」という記事が見える。福島四郎編集『婦女新聞 第8巻 明治40年』（不二出版、1989）、32頁。

²⁶ 前掲「20世紀初頭における日本人女子教員の中国派遣」。

²⁷ 筆者は調査の過程で自ら志願して渡清する女性も存在したことに気づいた。すなわち、1904年8月に東京の高等女学校の教員であった三角錫子は、来日中の厳修を訪ね、自ら渡清の希望を表明したということである。厳は日記に以下のように記している。

三角錫子擬赴清助興女學

六時起。伊藤伊吉君及所紹介之三角錫女史來訪、約談兩小時。三角君曾畢業于高等女子師範學校、繼為師範學校教習、今在芝區高等女學校為教頭、與小川銀次郎同事。科學尤深于理化。父母俱亡終身不嫁。兩弟在工科大學皆有聲譽、學為衆冠、得力于姊教為多。明年兩弟當卒業、三角君一身無系戀、擬赴吾國助興女學雲。

なお、三角は何らかの理由で最終的には渡清しなかったが、彼女のように自らの意思で積極的に渡清を望み、中国教育に身を捧げようとした女性がいたことには留意すべきである。厳修撰・武安隆、劉玉敏校正『嚴修東游日記』（天津人民出版社、1995）、228頁。また、武安隆「兩度瀛山采葉婦—20世紀初頭嚴修考察日本教育述略」『日本研究論集』（天津人民出版社、2005）、453頁。

²⁸ 大正元（1912）年、大正1年及び大正2年の『支那備聘本邦人名表』（国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵、レファレンスコード：B02130227900、B02130228100、B02130228300）の記載によれば、この時期に引き続き在清した女性教習は、峯旗操子、田添幸枝、太田喜智、宇佐美ナヲ、石田松子である。

²⁹ 例えば、欧米は中国教育界での地位の回復を図り、日本教習を批判の対象とした。1907年6月2日、The New York Daily Tribuneに掲載された「China don't want Japanese Teachers」という記事は「日本人が泰西の教

③、④では先行研究を踏まえつつ、比較的入手しやすい新史料を補充し、②、⑤では積極的に新しい史料を発掘した。

1. 蒙養院での活動

①戸野美知恵、丹雪江、丹トク、武井初子と湖北幼稚園

湖北幼稚園は張之洞が提起し、湖北巡撫端方が創設した幼稚園である。同園は近代中国における最初の公立幼稚園とされるが³⁰、構想段階から日本の幼稚園が参照され、創設に際しては日本女性教習が大きな役割を果たした。すなわち、清末中国では幼稚園開園の経験が乏しく、設備や教材もなく、ことに幼児教育を実践できる保母の不足という問題があった。そこで端方は、1903年、弘文学院出身の任憲吉を幼稚園の監督に任命し、日本から教具等を購入させるとともに、日本政府を通じて保母を招聘させた³¹。日本政府がこの要請に応じたことが、4月10日付で内閣総理大臣桂太郎名による教習の派遣決定の文書が作成されていることから判明する³²。同年秋、戸野美知恵、丹雪江、丹トク、武井初子の4人は官命を受けて渡清し、幼稚園の開設準備に取りかかり³³、翌1904年2月に開園した。

湖北幼稚園の総責任者として園長に任命され、幼稚園章程の起草や教育課程の設計を担当したのは戸野であった。その「湖北幼稚園開辦章程」（全22条）は、第1条で「幼稚園は家庭教育の不完全なるに因りて設け、専ら小児の自然智能を輔けて事理を開導し、徳性を涵養して小学堂の基礎を備ふ」と開設の趣旨が明らかにされ、第2条で「幼稚園は養を重んじて学を重んぜず、児童にして未だ学齡の年に及ばざるもの皆其の期に當る」と方針が定められ、第3条以下で園内に開誘室、訓話室、陳列図書玩具室等の11室を設け、保育科目は主に行儀、訓話、手技、唱歌、遊戲、日語とし、子どもを毎日3時間預かることなどを規定している³⁴。この章程を日本の「幼稚園保育及設備規程」（1899年）と照合してみると、ほぼその旨趣を踏襲したものであることが分かる³⁵。「幼稚

師より低廉なる給料を以て、之を招聘するに容易なりと雖も、彼の只だ皮相淺薄なる学識により直ちに自ら以て学者なりと信ずるの愚に在りて存す」と日本の教習を批判し、それを駐上海総領事館の内山書記が報告している。内山によれば、上海だけでなく、他の都市にも西洋の「新学校」が開設され、生徒は日々増え、卒業生の中で優秀な者を選抜して自国に留学させているため、中国の生徒は日本より西洋に憧れ、崇拜する心理が作られているという。前掲『中国人日本留学史稿』、191頁。また、「上海ニ於ケル学校調査送付ノ件」（国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵、レファレンスコード：B12081886700）。

³⁰ 前掲『中国の近代教育と明治日本』、197頁。

³¹ 李又寧、張玉法主編『近代中国女權運動史料 1842-1911』（龍門出版社股份有限公司、1995）下冊、1055頁。

³² 「女子高等師範学校教諭戸野みちゑ第一高等学校教授稲並幸吉及同菅虎雄清国政府ノ招聘ニ応シタルノ件」（国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵、レファレンスコード：A04010074900）。

³³ 前掲『清末日本教習与中国教育近代化』、49頁。

³⁴ 「湖北幼稚園開辦章程」（『東方雜誌』1巻11号、商務印書館、1904）、258頁。原文は以下の通り。句読点は筆者による。

第一條：幼稚園因家庭教育之不完全而設，專輔小兒自然智能開導事理，涵養徳性以備小學堂之基礎爲宗旨。

第二條：幼稚園重養不重學，兒童未及學齡之年皆其當期，有此蒙養將來就學自然高人一等。

園」という名称も、当時の中国では蒙養院が通常の呼び方であったから、日本式の名称の採用と言える。戸野は丹と武井らの協力を得て、2年にわたり同園の運営に尽力し、次いで武昌女子師範学堂の創設にも参画した³⁶。また、丹雪江と武井は同園に附設される「保育科」の教習も担当した。保育科は「女子速成保育科」とも称され、幼児教習を養成する専門コースであった。詳細は不明であるが、丹雪江と武井は保育科で60余人の女子を対象に保育知識を教授したという³⁷。同園の保育科は近代中国で幼児教習を組織的に養成する最初の試みであったと目され、その開拓者の足跡をどのように評価するかは今後の課題である。

②大野鈴子と嚴氏蒙養院

貴州学政であった嚴修は、戊戌変法の後、故郷の天津に戻り、教育事業、特に女子教育事業に専念した。嚴は1902年と1904年に2度日本へ赴き、教育の制度、課程、方法等を視察・調査した。1905年、嚴は幼児教習を養成する保母講習所を開設するため、渡日時に知り合った大野鈴子を招聘した。大野は、嚴の幕僚であった大野捨吉の姪山田煌子（旧姓は大野）の妹である³⁸。1901年大野捨吉は嚴の息子2人を連れて日本へ遊歴し、山田の義弟である田島正直の家に泊まった。山田が大野捨吉と田島の委託を受けて嚴の息子の世話をしたため、嚴から格別に感謝された。こうした大野捨吉、山田と嚴の関係を通じ、大野鈴子は渡清したのであろう³⁹。

大野の教育歴は未詳であるが、大野は同所の運営を任せられ、また保育法、音楽、体操などの授業を担当し、受講者は約20人を数えた。また同所には教育実習のための蒙養院も附設され、天津で最初の蒙養院として、大野はその運営も担った⁴⁰。当時大野の様子について、嚴修の孫である嚴仁清は以下のように追憶している⁴¹。

大野鈴子は保母講習所で保育法、音楽、ピアノ、体操、遊戯、手工などの科目を担った。大野は中国語ができないため、日本語に堪能な嚴智燭が通訳を行った。……大野は丁寧にピアノを教え、受講生に対する要求も非常に高かった。……受講生は卒業時、皆少なくとも進行曲を弾け、難しい曲を弾ける者もいた。……蒙養院は実習の場である。大野は半日授業し、半日蒙養院で受講生の実習を指導した。……大野は最初に自分でピアノを弾いて手本を見せ、唱歌や遊

³⁵ 「幼稚園保育及設備規程」（文部省令第32号）の第5条第1には「幼児ヲ保育スルニハ其心身ヲシテ健全ナル發育ヲ遂ケ善良ナル習慣ヲ得シメ以テ家庭教育ヲ補ハントヲ要ス」、第2には「保育ノ方法ハ幼児ノ心身發育ノ度ニ適応セシムヘク其会得シ難キ事物ヲ授ケ或ハ過度ノ業ヲ為サシメ又ハ之ヲ強要シテ就業セシムヘカラス」とある。米田俊彦編『近代日本教育関係法令体系』（港の人、2009）、226頁。

³⁶ 前掲『中国の近代教育と明治日本』、198頁。

³⁷ 楊潔琮「日本教習对中国幼教事業初期發展的影響」（『学前教育研究』2、2011）。

³⁸ 嚴修と大野捨吉が知り合ったのは早かった。1901年4月に嚴修は大野捨吉を招聘して日本語科目を担当させた。「嚴修与張伯苓共同教育事業の開創」（『南開大学報』1313期、2016年10月14日付、3版）。

³⁹ 前掲『嚴修東游日記』、38-39頁。また、嚴仁清「祖父嚴修在天津創弁幼児教育的回憶」（中国人民政治協商會議天津市委員会文史研究委員会編『天津文史資料選輯』25、天津人民出版社、1983）、48-49頁。

⁴⁰ 齊植璐「天津近代著名教育家嚴修」、同上『天津文史資料選輯』25、16頁。

⁴¹ 前掲「祖父嚴修在天津創弁幼児教育的回憶」、48-49頁。

びを教えた。その後、受講生はそれを子どもに教え、大野はそばで指導した。蒙養院の設備は日本から購入して整えた。例えば、ピアノ、オルガン、児童の机、椅子、教具などはどれも日本で作られたのである。……童謡も殆ど日本語から翻訳したものであり、多くは礼儀、動植物などに関する内容である。……例えば、『雄鶏打鳴』という童謡は、北京と天津の多くの蒙養院に伝わり、よく使われた。……物語は日本の桃太郎や小雀などがあった。

これより、大野が幼児教習の養成に実習を組み込み、その実習の場としての蒙養院が天津や北京の幼児教育の展開に影響を及ぼしたことが窺える。

2. 女子小学堂での活動

③河原操子と務本女学堂及びカラチン毓正女学堂

務本女学堂は、1902年、呉懷疚が上海に設立した中国最初の女学堂である。女学が教育の根本であるという意味で「務本」という⁴²。呉は開校に際し、女性教習の招聘を下田歌子に依頼した。下田は呉に、東京女子師範学校卒業生で横浜の大同学校に勤務する河原操子を推薦した。下田に会った河原は単身渡清し、中国女子教育に従事する意を固めた⁴³。

上海に着いた河原は、日本の小学校をモデルとし、務本女学堂の目的、科目、方法などを定めた。河原によれば、「最初の生徒は、四十五名なりしが、其年齢及び学力の差等は、驚くべき相違ありて、最少なるものは八九歳、最長なるものに至りては三十歳を越ゆるものさへあり」という状況であった。これに応じるため、河原は生徒を三つの学級に分け、授業を行う方策をとった。河原の担当科目は日本語、算数、唱歌などであり、「生徒は此等の学科に対して少なからぬ興味を有し、熱心に勉強」し、「唱歌と会話との時間の如きは、教習をはじめ、生徒の父兄等、ことに婦人は輻に乗り、あるいは人の肩に寄りなどして、傍聴に来るもの」もあった⁴⁴。河原の努力は実り、同学堂の評判は上がり、入学者も増えた。開学から半年後、生徒は100人を超え、河原の名は広く知られるようになった。

1903年、内蒙古のカラチン王は府内で毓正女学堂の設立を計画しており、上海で実績のある河原を招き、学堂の経営を任せることを望んだ。11月、河原は北京で駐清公使の内田康哉に面会し、教育顧問の資格で入蒙する官命を受け、12月、カラチンに赴いた⁴⁵。カラチン王は日本に「元来女子教育は数千年の昔より此地に未だあらざる所に候へども、今幸に良師を得候へば愚頑の生徒ら御蔭にて文化に向ふべく、而して是が全蒙古女子教育の起点たるべく候へば、洵に欣喜の至に御座候」

⁴² 朱有瓚編『中国近代学制史料』（華東師範大学出版社、1989）2輯下冊、589頁。

⁴³ 前掲『中国の近代教育と明治日本』、198頁。

⁴⁴ 一宮操子『蒙古土産』（実業之日本社、1909）、13-14頁。

⁴⁵ 同上、98-99頁。また、河原は入蒙に関して、「日本女流の雄志」（『教育時論』672号、1903年12月15日付、「時事寓感」欄、45頁、『教育時論』86、雄松堂書店、1982）、「蒙古紀行」1-4（『婦女新聞』198-201号、1904年2月22日、29日、3月7日、14日付、福島四郎編集『婦女新聞 第5巻 明治37年』不二出版、1982、70、80、88、98頁）を執筆している。

と謝意を表し、年末に開校式を行いたい旨を伝えた⁴⁶。

カラチンに到着した河原は、急ぎ章程の起草に着手した。河原の作成した「毓正女学堂章程」は17章30条からなり、目的、科目、経費をはじめ、時間割、試験、服装、懲罰などを定め、体系的であった。目的には「知識を発達し、身体を健全にして高尚の性情を養い、賢良の基礎を立てる」ことを掲げ、まず尋常科（4年）を置き、次いで高等科（4年）も開設することを計画した。また、向学心のある者のために専修科、学力不足者のために補習科も設ける予定であった⁴⁷。しかし、府内の王女や宮女たちは、その新しさに驚き、入学して勉強するどころか、かえって反感を抱いた。カラチン王はあれこれ策をめぐらしたが、最後には棒を持って無理やり彼女らを入学させた⁴⁸。開校後、「陰曆新年に入りて、学生数はまして六十名」となり、「幼者は七八才より、年者は二十三歳（二十歳以上のものは一人のみにて、多くは十四、五、六、七歳位なりき）」であった。河原は生徒を習熟度別に頭班、二班、三班の3クラスに分けて教授する方法をとり、自らも半数の授業を担当し、日本語、算術、家政、編物、体操などの科目を教えた。河原によれば、技芸が生徒の「最も好む所」であり、中国女紅（女工）のような裁縫、編物が「他の何の科より喜び、従って又巧み」であった。また、最も成績が芳しくなかったのは数学、算術であったが、「生徒は別に嫌う様子もなく、熱心に勉強した」。ただ「地理歴史の観念は皆無」であったという⁴⁹。第1期の卒業生の成果として、彼女らの手芸品及び書画数十点が日本へ送付されたこともあった⁵⁰。

なお、河原は3年後の1905年末に、学堂で選抜された何恵貞、于宝貞、金淑貞の3人を伴って帰国し、下田の実践女学校に託した⁵¹。その後を任された鳥居きみ子は引き続き蒙古の女子教育振興に努めた。

④服部繁子と豫教女学堂

豫教女学堂は、1905年、実業家の沈鈞により創設され、北京における近代女学堂の嚆矢である。この創設に欠くことのできない役割を果たしたのが服部繁子であった。沈は当時、夫の宇之吉とともに北京にいた繁子を招聘し、学堂章程の起草、教習の招聘、課程の編成、科目の決定など、学務全般を任せた。繁子は佐伯園子、加美田操子を招聘し、亀田操子、服部升子らも相次いで加入し、教習陣の充実を図った⁵²。

⁴⁶ 「河原女史の名誉」（『婦女新聞』195号、1904年2月1日付、「雑報」欄、同上『婦女新聞 第5巻 明治37年』、44頁）。中国語の原文は以下の通り。

惟此女學本數千年所未有，今幸得良師，雖生徒愚頑，當可向化也，殊堪爲全蒙女學起點，慶矣。

⁴⁷ 前掲『蒙古土産』、149-155頁より抜粋。

⁴⁸ 「蒙古教師日本河原操子女史」（『女子世界』11期、1904、前掲『女子世界』3、1017頁）。

⁴⁹ 前掲『蒙古土産』、158-159頁。

⁵⁰ 「蒙古喀喇沁王府育正女学堂学生写真並二製作品送付ノ件 明治三十九年一月」（国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵、レファレンスコード：B12081873200）。

⁵¹ 刑復禮「清末日本女間諜河原操子在喀喇沁的活動」（中国人民政治協商會議內蒙古自治區委員會文史研究委員會編『內蒙古文史資料』15、內蒙古人民出版社、1984）、128頁。

繁子が起草した「豫教女学堂章程」（全18章55条）によれば、「本学堂は中等以上の女子に普通教育及び高等普通教育を施し、賢母良婦を養成することを以て目的」として、修業年限4年の尋常科（満6歳以上）と高等科（満10歳以上）を設けた。尋常科には修身、国語、算数、歴史、地理、図画、声歌、遊芸及体操、裁縫及刺繍の9科目を置き、高等科には尋常科の9科目に加えて、格致、家事、外国文を置いた⁵³。

豫教女学堂の授業の様子は明らかではないが、授業は多くの場合、中国語と日本語の両方で行われていたようである。繁子自身は在清中に中国語を覚え、中国語に通曉していたが⁵⁴、「支那語の不達者な教師ですと、込いった講義は黒板へ漢文で書き示す」という方法で授業を進めていたと回想している⁵⁵。教習の教授法は、繁子がいう漢文の板書のほか、中国語未習得の教習に通訳を配し、日本語による授業を中国語も通訳して生徒に伝えられた。これを汪向荣は「二重講義の間接教授法」と呼んでいる⁵⁶。この教授法は、嚴氏保母講習所の大野鈴子もこれを用い、少なからぬ日本教習が用いる方法であっただろう。

3. 女子職業学堂での活動

⑤松里島子、森田国子と福建女子職業学堂

1905年10月、福州の名士である陳宝琛らは、現地の学務に関する情報と意見の交換のために、「閩省学会」の設立を発起した。翌年2月、「閩省学会」は「福建教育総会」と改称され、積極的に教育事業を推進した。この時運に乗って、1907年4月に福建女子職業学堂が創設された。陳宝琛は名誉堂長の任に当たり、陳の妻である王眉寿がその運営を司った⁵⁷。

開学当初は刺繍、造花という2科目を設置し、合計50名の女生徒を募集した。また、具体的な招聘ルートは不明であるが、同学堂は東洋婦人会の清国派遣女教員養成所の1回生松里島子を招聘し⁵⁸、同時に清国在住の産婆であった森田国子を雇い、松里の助手とした。福建女子職業学堂は中流以上の家庭出身の女子を対象とし、中国の「婦人ハ久シク儒教ノ弊習ニ染ミ、深窓ニ蟄居シ、因循為スナキヲ以テ徳トシ、其陋風今日ニ至リテ醒メス」という状況下であって、「宜シク新教育ヲ施シ、

⁵² 服部繁子「北京の女学界」（『女鑑』第16年1号、1906年1月1日付、「女鑑新聞」欄、3号3面、中寫邦監修『女鑑』第59巻、大空社、1993）。

⁵³ 「豫教女学堂章程」（『東方雑誌』2巻12号、商務印書館、1906、336頁）。

⁵⁴ 増井経夫「秋瑾女士の思い出」（『季刊東西交渉』1巻3号、1982）。

⁵⁵ 服部繁子「支那婦人の特質」（『女学世界』12巻7号、1912、『女学世界 明治期復刻版②』柏書房株式会社、2011、101頁）。

⁵⁶ 前掲『日本教習』、118-119頁。

⁵⁷ 福建省政協文史資料委員会編『文史資料選編』（福建人民出版社、2000）第1巻、371-372頁。

⁵⁸ 同上、372頁。また、1907年8月26日付の『婦女新聞』381号の「女学界」欄において、「清国派遣女教員養成所」と題して、第1回卒業生の務める場所を述べた。具体的には以下の通りである。前掲『婦女新聞 第8巻明治40年』、294頁。

清国派遣女教員養成所 東洋婦人会附属同所卒業生大杉春子氏は、漢口武昌張之洞總督の家庭教師に、同卒業生松里島子氏は、福建省女子職業学校教習にいずれも近日派遣せらるゝ由、因に同所にては来る九月新学期に生徒を募集せり。

有為ノ文明婦人ヲ養成」することを目指した。学堂の修業年限は2年であり、開設科目について、中国人教習の担当した国文、作文以外に、編物、刺繍、造花、日本語などの科目は全て松里島子、森田国子が担当した。生徒は「年齢ハ十五歳ヨリ三十歳ニ至リ、学力ハ小学卒業位ノ程度ニシテ、生徒一半ハ有夫ノ婦人」であり、開学後は「土日曜両日ニ帰宅」でき、「平素寄宿住居ナリ」と定められた。それらの女生徒は元来「學術等ニハ重キヲ置カザレドモ」、その「洋漢折衷ノ手工」類の科目に特に興味を持ち、それゆえ「進歩早々遙カニ日本婦人ノ上ニアリ」、「思想緻密忍耐力アリ、女子ノ職業ハ尤モ適當」と称賛された。また慣例では、4ヶ月の習業を終えると、学堂は展示会を開き、彼女らの編物類、刺繍、造花などの作品を学堂内外の人々の観覧に供した⁵⁹。なかでも、1909年6月の第1回卒業生は30人であり、そのうち、曾明は成績が最も優れ、学堂の助手に抜擢されたが、彼女の「馬」という刺繍作品は、1915年米国のサンフランシスコ万国博覧会で最優秀賞を獲得し、今は北京の故宮で保管されているという⁶⁰。

おわりに

以上、本稿では、清末、中国女子教育の草創期に渡清した日本女性教習を取り上げ、彼女らの清国での活動及びその特色等について考察を行った。以下では、これまでの考察をふまえ、日本女性教習に対する評価について若干の見解を示したい。

まず、今日から見れば、当時の日本女性教習が担当した科目はたいした内容ではなかったという見方もできるが、草創期における中国女子教育の発展に果たした役割は無視できない。彼女らの多くは日本で師範教育を含む中等以上の教育を受けたか、あるいは教職の経験を有し、中国各地で女子教育機関の立ち上げに関わり、経営に参与した。本稿では限られた例を示した過ぎないが、戸野美知恵、河原操子といった一部の教習は、単に一教習として授業を担当しただけでなく、蒙養院や学堂章程の起草に指導的役割を果たし、教育組織の設計、教育課程の編成なども行った。また、一部の蒙養院や学堂での日本女性教習の取り組みは、周囲に影響を与えていった。それは河原操子を招いたカラチン王がその実践を「教育の起点」と評したことによく表れている⁶¹。

また、日本女性教習の教育活動は、当時家庭内に縛られ、女徳倫理を生涯の一切とした中国の女性観に衝撃を与え、中国の中上流家庭の女子が家庭から出て、近代教育を受けることを可能にし、彼女らが外部世界に触れるためのプラットフォームを提供した。もちろんそれら中上流家庭の女子は当時の2億人の中国女性を必ずしも代表できないが、日本女性教習の教育活動が草創期における中国女子教育を先導したことは否めない。

⁵⁹ 前掲「清国福州女子職業学校状況同地領事ヨリ報告 明治四十一年二月」。

⁶⁰ 徐曉望『福建通史』（福建人民出版社、2006）5、263-264頁。

⁶¹ 前掲「河原女史の名誉」。

清末中国における女子教育近代化過程の一断面
—日本女性教習の活動及びその特色を中心に— 孫 長亮

なお、日本女性教習が教育の組織や課程の整備だけでなく、教育の理念や価値、特に日本の「良妻賢母」式教育の普及についてもそれを促す役割を果たしたであろうことについては、今後、稿を改めて論じたい。